



これまでネット上から、如何にして一味違うネタ探しをするか、そのための検索ポイントを紹介してきた。今回からは、こうした検索によって入手した情報／資料の記載内容のチェックポイントを紹介しよう。特に、資料に記載されている内容と記載されていない内容のチェックについてから言及してみよう。

第二十四話 資料のチェック① 記載内容と未記載内容のチェック

今回からは、検索・入手した資料の内容のチェックの方法について、説明することにする。最初は、入手した資料に記述されている部分と記述されていない部分のチェックについてである。

記述されていない部分、すなわち、未記載の内容部分に関するチェックである。これには多大な労力が求められる。ただし、未記載の部分に隠れていたネタを見出すことが出来れば、労力以上の報酬は得られるとあってよい。

このチェックが重要なのは、冤罪事件や新発見のように、たった一つの情報が追加されただけで、記載内容の全体像が逆転してしまう場合があるからである。

次に、記述されている部分や内容について、事実にもとづいているかどうか、正しいかどうか等に関するチェックである。記述内容には、事実に基づかない憶測や個人的見解に過ぎないものも少なくない。また、事実関係についても不正確であったり間違っている記述も少なくない。

これらをチェックするには、それなりの労力とリテラシーとが求められる。激動の時代は、専門家であっても、想定外の経済・社会の多発や画期的な技術・製品やサービスの登場によって、今現在を正し読み解くことは、大変難しくなっている。

アラブの春による政権崩壊、ギリシャの経済危機、日本の東日本大震災の地震・津波災害などにより、世界の経済・社会の仕組みは様変わりしてしまい、世間をみる我々の世界観も、大きく変わってしまった。

また、グーグル・マップ、スマートフォン、GPS（全地球測位システム）などの

新製品や技術革新の登場によって、我々の生活スタイルは大きく変化した。それ以前と以後では、資料の見え方や読み方は、大きく変わってしまったのである。

例えば、昨年の東日本大震災と福島原発事故によって、専門家である原子力技術者や地震学者も含め、日本人の多くが、原子力発電所や津波に関する常識を覆された。それまでの地震・津波・原発の資料の記述内容についての見え方は、誰もが大きく変わってしまったといつてよい。

さて、本題に戻ろう。まず、書かれていない記述内容を、どうチェックするかである。自分の専門領域に関しては、自分の豊富な知識や経験によって、記載されていない範囲や内容は、ある程度はイメージできる。

しかし、たとえ専門領域であっても、想定外の事件や事故が起こった場合は、このイメージの有用性は失われる。東日本大震災の場合は、「津波の影響」であった。地震や原発の専門家の多くにとって、津波は想定外であり、過去の津波被害の記載内容には無頓着であった。しかし、いまや過去の津波資料が重要になったのである。

書かれていない記述内容をチェックする基本的な方法は、異なる資料を突き合わせて比較することである。この比較によって、共通部分と異なる部分とがわかる。相反する資料を突き合わせれば、記載されていなかった大きな部分が、見えてくる。

異質な資料を探す範囲を、自分とは異なる専門・業務領域、さらに海外の資料にまで広げることが、次の作業である。特に、海外の資料は、自分にとって見えなかった領域の情報を、教えてくれる場合が多い。

例えば、作家の冷泉彰彦氏は、「台風、ハリケーンと防災体制における「効率」の問題」（ニューズウィーク日本版、2012年6月20日号）で、日本とアメリカでは防災体制に関する考え方が、基本的に異なる事例を紹介している。

我々日本人にとって当たり前になっている防災体制とは異なる有効な方式が存在しているという情報は、大変貴重である。アメリカ方式が環境の異なる日本にとって有用かどうかは別にして、新しく有効な防災体制を探す糸口になる。

次に、記載されている内容に関するチェックである。まず、最初にチェックすべきものは、事実に関しての記述の欠落であり、次に、正確性のチェックである。

新聞の事実関係については、4W1H（When／Who／Where／What／How）が必要とされているが、それが欠けている資料は、数多く認められる。新聞社のウェブページの記載でも、記載日が月日のみで、年度が不明なものが多い。一般のブログになると、記載日すら不明なものも多く、資料としては利用できない。

また、間違った記述も少なくない。資料として利用するには十分な注意が必要となる。例えば、2011年に三菱重工がサイバー攻撃にあった事件である。三菱重工が異常を検知し感染事実を確認したのは8月、マスコミが事件を報道したのは9月である。この事件を紹介するウェブページには、9月に事件が起きたように記載しているものが少なくない。新聞の掲載日と取り違えたのであろう。

次に、記載内容に事実の裏付けがあるのか、憶測にすぎないかのチェックである。

マスコミの記事でも、裏付けのない記載が多い。専門家の経験や憶測、学者の理論や一般論的見解に頼っている部分が多い。不明な事実部分を憶測でカバーしようとしている。昨年の福島原発事故の発生後には、この種の情報が氾濫したのである。

ちなみに、福島原発の事故原因の多くについては、事故後の1年以上経過した現在でも、依然として不明であるといつてよい。これについては、3つの異なる事故調査委員会が、それぞれ調査結果を報告しているが、事実に基づく原因説明には、程遠いといつてよい。

このような記載内容のチェックの手続きとしては、同種の資料を比較参照することから始めるのが順序である。例えば、新聞社の記事同士の比較チェックからはじめるのである。

次に、少し時間を暫くおいてからの記事との比較、全国紙と地方紙、業界紙などから、週刊誌や月刊誌、商業専門誌、さらに公式報告書へと比較の範囲を広げて、チェックしていくのである。

次に、記載内容の事実確認が難しい表現に、注意を払う必要がある。例えば、「世界初」、「日本初」、「史上初」といった表現である。論文を書く際に、この記述が正しいかどうかを、丹念に調べなければならなくなる場合も出てくる。

例えば、「X X機種はY Y年に登場した世界初のコンピュータである」といった記述である。何が問題になるかといえ、コンピュータの定義によって、世界初が大きく変わってしまうからである。

どのタイプのコンピュータを対象とするか、例えば、概念、機械式、電気式、専用機、汎用機のタイプによって、世界初の時期は違ってしまう。興味のある人は、大駒誠一著『コンピュータ開発史—歴史の誤りをただす「最初の計算機」をたずねる旅』(共立出版、2005年)を参照されたい。

次に、一次資料と二次資料との間の比較参照である。引用する側の資料と引用される側の資料との比較が重要である。例えば、政府や企業の発表(ニュースリリース)とこれを報じる新聞記事の比較である。政府発表と新聞記事とでは、受け取る内容のイメージが、大きく異なる場合が少なくない。

通常は、マスコミの記事で済ましてしまう場合が多いが、資料として参考にする場合に、情報源である政府の公式サイトをチェックする事が、必要になる。

☆☆

WebCR 編集部からのお知らせ

本誌に連載／掲載されている記事に関するご質問、ご意見をお待ちしております。近い将来に予定されているプロジェクトに先立って不安や問題点の確認をなさりたい方、現在進行中のシステムのプロジェクトマネジメントにおけるトラブル関連など、何でも結構ですので、下記メールアドレスまでお寄せ下さい。

cr-info@jmsi.co.jp

☆☆